

福井支部ニュース

2023年度 第6号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆2023年度 JSA 福井支部 第8回幹事会の概要報告 (山根 清志)
- ◆『福井の科学者』140号 の販売・普及にご協力を (高木 秀男)
- ◆報告 公開市民講演会「放射性廃棄物問題の現状と展望」 (山本 雅彦)
- ◆書評 「資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか」 (小野 一)

[2023年度 JSA 福井支部 第8回幹事会の概要報告]

2024年1月15日(月)午後6時から第8回幹事会がオンライン方式で開催された。前もって案内のあった議題に沿って議論された。

1、能登半島地震について、現状と対応について

(1) 津波警報が出て、敦賀市においてはどのような避難行動がとられたかについての報告や、稼働中止をさせるべく原発施設にTELしたところ、休みで人がいないとの対応であったとの報告があった。

(2) 能登半島地震関連での研究助成について

小野一幹事から、研究題目：人口流動社会における災害復興と地域の未来像 —「能登半島地震」以後を考える学際研究— に関して、どういう要件がそろえば研究助成に申請できるか議論が投げかけられた。様々な意見が出たが、結論を得るには至らず、引き続き議論していくことになった。

(3) 1月18日(木)13:00～ 原子力市民委員会の緊急オンラインシンポジウム「能登半島地震から問い直す原発稼働の危険性」について

・同シンポジウムにおいて、日本科学者会議会員の大島堅一氏(龍谷大学政策学部教授、環境経済学・環境政策学)、立石雅昭氏(新潟大学名誉教授、元新潟県技術委員会委員、地質学)も報告する、とのこと。

2、『福井の科学者』(140号)50周年特大号について

(1) 投稿者と投稿内容の現状と校正、印刷などのついて

- ・1冊1000円で200冊、ホープ印刷(福井)さんに1月10日に発注した。なお、目次に誤りが見つかったため、印刷開始は少し遅れて1月12日であった。製本は金沢の業者が担当、1月20日ごろ納品の予定。
- ・執筆者総数は20名、そのうち2名が2本執筆している。

(2) 予算と発行部数、及び売り広めについて

- ・特大号製造費用は13万8千円。当面の発行部数は200冊。
- ・売り広めに関しては、2.11集会、3.11メモリアル集会等の集まりなどの機会に会場で販売し、さらに会員拡大にも役立てる。支部ニュースで特大号特集を組んだり、それ用の宣伝チラシを作って、売り広める。

3、支部会計と会員拡大について

- ・担当の伊藤幹事から、現在の残高、会費納入状況等に基づき、財政状況の説明があった。
- ・『福井の科学者』特大号の1月20日ごろ出来上がり予定を見越して、それを『日本の科学者』2月号の附録として発送予定(1月中を予定)。
- ・特大号200冊のうち90冊程度(会員分+執筆者への進呈分+図書館へ寄贈・購入分+定期読者分+予備)は伊藤幹事が保管。その他110冊が売り広めの対象となる。

4、支部例会

(1) 熊本地震と原発、断層の問題

- ・岡本拓夫・福井高専教授(地震学)の講演について

2024年1月28日(日)10時～ 県教育センター3階

- ・開催方法は、対面とオンライン(Zoom)で行う。当日の司会者として、木戸幹事、伊藤幹事に依頼する。

(2) 報告者を森透幹事とする「子どもシェルターふくい」について、2 月か 3 月あたりで報告できないか検討してもらうこととなった。

- ・他の例会候補テーマについては、まだ具体的検討が進んでいない。

5、北陸シンポについて

開催日時と方式：2024 年 4 月 XX 日(土) 13：30～16：30

- ・福井支部としては 4 月 13 日（土）にほぼ決定したが、他支部の都合と調整する必要がある。内容については以下のことを確認しているが、今次の能登半島地震を考慮し検討する必要があるかも知れない。
- ・全国市民公開型でオンライン方式（Zoom、配信担当は山本雅彦氏）
- ・テーマ：『核のゴミ処分と住民安全性の観点から「原発回帰」を問う』
- ・基調講演：小林昭三氏（新潟大学名誉教授・JSA 会員）
「副読本の問題」（仮題）（30 分＋討論 15 分）。
- ・各県からの基調講演に沿った報告は、3～4 件で合計 60 分。
途中休憩：15 分
- ・一般報告（テーマ＆基調講演に沿ったもの）：3～4 件で合計 60 分

6、支部ニュースについて

- ・小倉担当幹事から、次号第 6 号は今週末の発行を予定しており、山根幹事から第 8 回幹事会の概要報告の原稿を受け取り次第編集作業に入る予定で、一両日中に概要報告をまとめて欲しい旨の要望が示された。

7、その他

- ・山根担当幹事から、本年の 2.11 集会の持ち方に関する報告があった。
『「建国記念の日」反対！民主主義と憲法を守ろう、2.11 福井県集会』
2 月 11 日（日） 午後 1 時半～3 時半 フェニックスプラザ地下会議室
講演：石川康宏氏（神戸女学院大学名誉教授）
「平和の準備を世論の多数に」
- ・提案されていた他の議題については、討議の時間がなかったので、次回以降の議題とした。

次回の第 9 回幹事会は 2 月 5 日（月）18 時からオンライン方式で開催することとなった。3 月は事務局長の都合がつかないので、開催しない。
終了時刻は 20 時 23 分、参加幹事は 10 名であった。（山根 清志）

【拡販のお願い】『福井の科学者』140 号 の販売・普及にご協力を（福井支部結成 50 周年記念特大号）

新年 1 月 20 日、支部結成 50 周年記念特大号と銘打った『福井の科学者』140 号が発刊されます。1981 年 11 月に『福井の科学者』30 号を福井支部結成 10 周年記念特大号として発行したことに倣ったものです。

会員の皆様のご協力により、140 号には力作を含む 22 編もの原稿が集まりました。従来、表紙に目次を掲げていましたが入りきらず、やむを得ず表紙のデザインを変えざるを得ませんでした。目次が書かれていた位置に、私が保存していた日本科学者会議福井支部と墨書された襷の写真を、小倉久和氏に撮ってもらい入れました。この襷は、今は亡き城谷豊代表幹事が 50 年ほど前に揮毫した手作りの年代ものです。私は城谷氏と共にこの襷を掛け夏の平和大行進に参加しましたが、今やこの襷のことを知っている会員は、福井支部内でも殆どいなくなりました。

さて、今回 142 頁の特大号として発行する 140 号は、販売・普及活動を前提として 200 部の発注をいたしました。そして本号の頒価は 1,000 円としました。印刷費用は 138,600 円です。200 部の印刷について、財政的に大丈夫かと心配する方もあろうかと思います。だが販売・普及活動に力をいければ、逆に財政的にプラスに働く可能性もあります。

最近の『福井の科学者』は 1 年に 2 回発行して、50 頁前後で 90 部印刷し、印刷費用は 2 号分で合計 100,000 円です。会員は無料、頒価は 500 円でした。今回は会員配布と謹呈分を除いた分を販売に回すわけですが、仮に 100 冊を売り切れれば支部の持ち出しは 38,600 円となり、支部の財政貢献となります。

もちろん 100 冊を売ることは容易ではありません。会員の皆様、特に執筆者の協力・力添えが是非とも必要です。執筆者には謹呈本が送られます。それを宣伝誌として活用し、販売・普及に繋げてもらえればと思います。『福井の科学者』は日本科学者会議福井支部の機関誌として 50 年の歴史をもつ雑誌であり、他県の支部からも高く評価されています。この機会に、改めて『福井の科学者』と日本科学者会議福井支部の存在を知ってもらう活動を、強めようではありませんか。（高木秀男）

【報告】公開市民講演会「放射性廃棄物問題の現状と展望」

～～まず「読む」こと、それが議論の第一歩です～～ 2023/11/18

2023年11月18日、福井市のアオッサの会場とオンライン(Zoom)併用で、小野一氏(工学院大学教授)の講演会が、JSA 福井支部と福井県AALAの共催で開催され、60人が参加しました。講演では、日本学術会議フォローアップ検討委員会が2015年に出した報告書「高レベル放射性廃棄物の処分に関する政策提言／国民的合意形成に向けた暫定保管」(以下、政策提言)を読み、その意義と限界性を明らかにしました。

講演で小野氏は、私たちは反原発運動で原子力発電所を止めることが焦点になるが、止めた後に残る放射性廃棄物をどうするのか、これが非常に厄介な問題で、福井県でも使用済燃料の県外移設が焦眉の課題で、他人ごとではないと指摘しました。

そして、問題の解決を示したとされる、政策提言の提言1と2を紹介。ガラス固化体が入ったキャスクの暫定的な地上保管(原則50年)とその後、最終処分場の建設を行うというもので、暫定保管をすることになるので、あたかもこれが最終処分場の対案であるかのような受け取り方がされていると指摘し、最終処分場を作るということを前提とし作るまでの一時的な保管場所として暫定保管ということ掲げているに過ぎない、と警告しました。

次に最終処分場について、地下深に穴を掘って埋めて二度と取り出さないもので、中間貯蔵施設というのは一時的な保管場所だと説明。しかし、中間貯蔵施設での保管が長期化し、実質的に最終処分場になるとの議論もある。よって、最終処分場の方も取り出し可能にすべきという議論もある、と紹介しました。

また、中澤高師さん著書「核のごみをどうするか もう一つの原発問題」を紹介し、「受益圏」(電力消費地・大都市部)と「受苦圏」(電力生産地・原発立地地域)の分離がもたらす不公正問題についても解明しました。そして、放射性廃棄物の最終処分場や使用済燃料の中間貯蔵施設は、どこの地域も受け入れたがらない、だから、これをどこかに造るということになれば、大変な対立を招き、ともすれば反原発運動の中に分断を持ち込むことになる、と指摘しました。

講演の最後に小野氏は、ドイツ政治の専門家として、ドイツの原発情勢についても報告がありました。

また、この講演会にはZoomによるオンラインで、北海道の稚内市や長崎県の対馬市からも参加がありました。対馬市の「核のごみと対馬を考える会」の会場では6名の方が参加。そこに参加された方より、今日は役員みんなで事務所に集まって、反対の看板を3枚設置する準備や。「核ゴミ反対のバッチ」を、カンパを集めて800個を作って活動を進めていると発言がありました。中嶋哲演さんもZoomで参加、意見交換されました。

参加者のみなさんから、今まであまり考えていなかった「受苦圏」と「受益圏」の関係は非常に考えさせられた。原発の立地地域と、その電気を使用している消費地とのみなさん運動が、重なり合うような運動が非常に重要だと思ったという感想がありました。(山本 雅彦)

【書評】「資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか」

ナンシー・フレイザー著 江口泰子訳 ちくま新書 2023/8

まるで青年に戻ったかのような読後感だった。読み進めるほどに世界が広がる高揚感は、ここしばらく味わっていない。社会主義思想など、何を今さら「時代遅れ」と言われるのが通り相場。破綻したソ連・東欧型国家(畸形的な道を進んだ中国や北朝鮮も)や古くさい社会主義「理論」の焼き直しに積極的意味はない。その一方で、新自由主義の行き詰まりは誰の目にも明らかである。変革へのグランドセオリーが今ほど必要な時代はないのに、グランドセオリーなき時代の閉塞感が暗雲のように垂れ込める。社会主義の思想的探求が、時代の要請に呼応して自己刷新を図り、将来展望を切り開く可能性はあるのだろうか。

答えは「イエス」である。本書の著者フレイザーは、いわゆるマルクス主義フェミニズムの論客。資本主義を成り立たせる労働力の再生産が(主として女性の)無償労働によりなされることを既存の経済学が見落としていると鋭く指摘し、新たな理論的地平を開いたマルクス主義フェミニズム。彼女の2010年代なかばから20年代にかけての講演や論稿をまとめた書物が、日本語訳として刊行された。

邦語タイトルは実は「大人しすぎる」意識で、原題は「カニバル(共喰い)資本主義」(カニバリズムは人肉食のこと)。序章で著者は言う。

「カニバル」の動詞形である「カニバライズ」には、装置や事業をつくり出すか維持するために、別の装置や事業から重要な要素を抜き取るという意味がある。・・・そして最後がウロボロス。これは、己の尻尾を咥えて円環を成す蛇のシンボルのことだ。これこそまさに、己の存在を支える社会、政治、自然――それはまた、私たち人間を支える土台でもある――を貪り喰うことを、あらかじめ組み込まれた資本主義システムにぴったりのイメージだ。これらをすべて合わせて、共喰いという隠喩は資本主義社会を分析する際に役立つ確かな方法となる」（9～10頁）。

この引用箇所が、すでに、既存のマルクス主義からの離脱を示唆する。資本主義は、単に「経済」システムとしてだけでなく「社会」の種類として捉えられるべき広義の概念である。利益第一経済が機能するための非経済的支援、そしてその支援を捕食する権限を経済に付与する社会秩序が必要なのだ。「たとえば自然と被支配民から収奪した富。たとえその価値を認められたとしても、つねに過小評価されるケア労働（育児や介護など）。資本が必要としながらも、削減しようとする公共財と公的権力。労働者の活力や想像力など」。企業のバランスシートには表れないが、資本主義秩序の本質的な構成要素であるこれらについて、第4章「呑み込まれた自然／生態学的政治はなぜ環境を超えて反資本主義的なのか」、第2章「飽くなき食欲／なぜ資本主義は構造的に人種差別的なのか」、第3章「ケアの大喰らい／なぜ社会的再生産は資本主義の危機の主戦場なのか」、第5章「民主主義を解体する／なぜ資本主義は政治的危機が大好きなのか」で分析が深められる。

これらの要素は、いずれも、現代社会が直面する危機の諸相だが、別々に生起するのではなく相互に関連している点が重要である。第4章で著者は言う。「まず考えてほしいのは、自然の略奪と人種的・帝国主義的な収奪が内部で結びついていることだ。無主地（テラ・ヌリウス）の所有権を主張し、資本が私物化する大規模な自然は、実際には誰のものでもないどころか、たいていある人間集団の生活舞台だ。・・・資本が収奪の照準を合わせたその集団は、ほぼ間違いなく、自分たちの身を守るための力をすでに奪われ、グローバルなカラーラインの向こう側に追いやられてしまっている。・・・同様の命題は、自然の再生産と密接に重なる社会的再生産についても当てはまる。・・・」（187頁）。共喰い資本主義の本性から帰

結する危機は、例外的にいくぶん緩和した表れ方をする時代もあるが、今日の金融資本主義体制下でむき出しのものとなっている。こうした分析は、第6章「思考の糧／21世紀の社会主義はどんな意味を持つべきか」の議論に収斂する。

手前味噌で恐縮だが、1年半ほど前に書いた拙稿の引用を許されたい。「グレタ・トゥーンベリがヨーロッパの若者を鼓舞していた頃、日本では斎藤幸平の新書が大いに売れた。脱成長経済は可能か。可能だとすればその条件は。この問いに正面から向き合う場合にのみ、脱成長コミュニズムは、時代のファッションアイコンとして消費されて終わるのではなく、「対抗言説への対抗言説」への対抗言説としての批判理論性を獲得し得るのである」（『唯物論』96号（2022年12月）115頁）。この時事評論の行間からにじみ出る私の不安は、残念ながら的中してしまった。

遅々として進まぬ地球温暖化対策に抗議し、金曜日の授業をボイコットしてデモ行進するなどの行動を起こした十代のスウェーデン人環境活動家は、一躍時の人となった。だが忘れ去られるのも早かった。過激化し逮捕された元環境少女、なるお上品な論難は当たらない。反省すべきは、都合よく持ち上げておいて旗色が悪くなるいとも簡単に見捨ててしまう大人社会の身勝手さ・不誠実さであり、時流に便乗した批判理論の底の浅さである。脱成長経済を唱える論者の多くは、脱成長経済は可能かという本質的な問いに向き合っていない。グレタの挫折、飽きっぽい世論、売れ続ける斎藤の本。「SDGsは「大衆のアヘン」である」という斎藤幸平『人新世の「資本論」』が、厳しい現実の中で気持ちを紛らわす麻酔薬のようにも思えてくる。

最もグランドセオリーが必要な時代にグランドセオリーが欠如しているもどかしさ。批判理論の再構築は容易ではないが、その試みは始まっている。フレイザーの著作は、貴重な第一歩だろう。（小野 一）

=====

＜編集後記＞

新年最初の支部ニュース、2023年度第6号をお届けします。

1/1 早々に能登で大地震が起き、1/2 には羽田で飛行機の衝突事故、世界では、ガザはますます深刻な状況になり、ウクライナも先が見通せない状況です。日本を含め欧米先進国は軍事対応・軍事強化の一辺倒で、外交努力は他人任せの状態で。次の世代の世界がどうなるか、非常に心配です。（OG）